

第2研究課題 第2分科会

「子供の発達に関する課題」

研究主題 「ふるさとに誇りを持って成長する生徒の育成」

—学校・家庭・地域の協働を目指して—

西予市立野村中学校 水口 雅彦

1 研究の概要

「ミルクとシルクの町」野村町。穏やかな風土のもとで育った本校生徒は、全体的に穏やかで明るく、人懐っこい性格である。一方で、学習やその他の教育活動に対して自信がなく、指示待ち型の傾向があり、自己判断力、自己決定力に欠ける面が見られる。

そこで、教頭として学校・家庭・地域がそれぞれの役割を果たすよう働きかけ、それぞれの環境を整えたり、生徒への学習面や情緒面での関わりを持たせたりすることで、生徒がふるさとに関心を持ち、そこで生活することに誇りを持つようになることを考える。また、学校運営協議会（コミュニティースクール）を活用し、学校の組織や環境等に対して、意見を聞く機会を設けることで、生徒が学校教育だけでなく社会教育とも深く関わることができ、より健全な成長が見られるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

実践内容	教頭としての関わり
(1) 地域との連携の強化 ア 地区別懇談会の充実 イ 町ぐるみで行う挨拶運動の充実	○ それぞれの校区で抱える問題点を持ち帰り改善点について、職員会で話し合う。 ○ コロナ禍でも分かる、野村スタイルの挨拶の仕方を生徒会とともに確立する。
(2) ICT教育推進チームの立ち上げ ア 校内体制の構築 イ 必要に応じた会議の招集 ウ 効果的なICT利用の情報共有	○ ICT教育推進に向けて、校内のICT機器の環境を整えたり、生徒の端末を活用した効果的な学習方法の話し合いを行ったりする。 ○ 長期休業中に日直校務の教員に、教育相談室（Google Classroom）を開室するよう依頼する。
(3) ローテーション道徳 ア 学級担任以外の教員の道徳の授業 イ 地域素材を生かした道徳教育	○ 全校体制で道徳の授業を行うため、職員への周知と、教務主任と協力して、実践可能な時間割を作成する。
(4) 学校運営協議会の開催 ア 協議委員への協力依頼 イ 意見の吸い上げ	○ 学校経営についての理解を求めるとともに、学校の抱える課題について、協議の場を設定する。
(5) 情報提供手段のデジタル化 ア 保護者への啓発 イ 地域・家庭への連絡の時間短縮	○ 学校からの情報提供やアンケートをデジタル化することで、保護者や地域への連絡時間の短縮を図り、業務改善にもつなげる。

3 教頭としての今後の課題

- (1) 挨拶運動を通して、地域との交流を図る上で、地域の一部の方との交流に留まっているため、今後どのようにして広げていくかを考える必要がある。
- (2) ローテーション道徳では、輪番に授業を行っているため、生徒にとって効果的な場面での授業が必要であると考えられる。
- (3) ICT機器の効果的な活用により、生徒の学習面での向上を目指しているが、目新しさが先行し、実際に向上に至っているかどうかについて検証しなければならない。

1 はじめに

「ミルクとシルクの町」野村町。穏やかな風土のもとで育った本校生徒 156 名は、全体的に穏やかで明るく、人懐っこい生徒が多い。一方で、学習やその他の教育活動に対して自信がなく、指示待ち型の傾向があり、自己判断力、自己決定力に欠ける面が見られる。また、地域の方々は、朝の挨拶を、誰に頼まれるわけではなく、それぞれの場所で行ってくださるなど、地域の子どもたちを大切に育成しようという気質がある。

そこで、教頭として学校・家庭・地域が連携し、それぞれの役割を果たすよう働きかけし、それぞれの環境を整えたり、生徒への学習面や情緒面での関わりを持たせたりすることで、生徒がふるさとに関心を持ち、そこで生活することに誇りを持つようになることを考える。また、学校運営協議会（コミュニティースクール）を活用し、学校の組織や環境等に対する意見を聞く機会を設けることで、生徒が学校だけでなく社会とも深く関わることができ、より健全な成長が見られるのではないかと考え、本主題を設定した。

2 研究の内容

(1) 地域との連携強化

ア 地区別出張懇談会の充実

例年、夏休み前に各地域に出向き、保護者に対して、「夏休みの過ごし方」等についての説明を行っているが、それにとどまらず、生徒の家庭での様子はもちろん、地域での様子や学校での様子を含めた、積極的な話し合いを行った。その際、教師側はできるだけ聞き役に徹し、保護者に家庭での関わり方をどのようにするべきかを決めさせたり、地域にどのように関わりを持たせるかを考えさせたりできるよう配慮した。

また、それぞれの地域から、登下校する中で改善してほしい事柄、要望等を積極的に出していただき、学校へ持ち帰り、職員会や必要に応じて学校運営協議会を開き、回答した。このように、慣例的な行事として扱うのではなく、学校・家庭、そして地域が生徒の環境をより良いものとなるように働きかけをした。

イ 町ぐるみで行う「あいさつ運動」の展開

毎朝、生徒会を中心に道路沿いで「あいさつ運動」を行っている。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、マスク着用での「あいさつ運動」は、通勤時のドライバーや道行く地域の方々へ、思いを届けることが不十分となった。そこで、中央委員会（生徒会や委員長の打ち合わせ）において、話し合いを行わせ、「おはようございます」の横断幕を作成し、それを見せながら、手を振るといった運動に



切り替えた。ドライバーの方々にも喜んでいただき、こちらに向かって、会釈していただいたり、手を振り返していただいたりするようになった。また、各通学路では、数名の地域の方々にも立っていただき、子どもたちの登校を見守っていただいている。初めのころは、通学の際、地域の方々に対して、やや小声での挨拶であったが、地域の方々の思いが子どもたちに伝わり、次第に声も出始め表情も明るくできるようになっている。

(2) ICT教育の推進

ア 校内体制の構築

GIGAスクール構想の下、一人一台の端末が整備されたことを受け、校内推進チームを立ち上げた。まずは万が一（臨時休業下）の事態においても学びの保障ができるよう環境を整えた。情報担当に限らず、興味のある職員に希望を募り、自分の得意な分野別に研究を進めることとした。

イ 授業改善

推進チームにおいて、生徒の端末（Chrome OS）を活用した効果的な学習方法についての話し合いを定期的で開催した。その中で、英語科のデジタル教科書の活用方法を研修したり、各教科でのソフトを実際に使用した授業を行ったりした。その後の授業研究においては、より改善を加えるように取り組むこととした。

ウ 効果的なICTの活用

長期休業中にはICTを活用し、登校日を端末上で設けたり、日直勤務の教員に定時にクラスを開室するよう依頼したりして、学習相談、教育相談の場を設けた。誰もが、2学期のスタートに向けて、少しでも不安のない状態を整えようと工夫した。

(3) 道徳教育の充実

ア ローテーション道徳

本校では、「特別な教科道徳」の授業を学級担任だけが行うのではなく、学年部付の教員を含めて、ローテーションを組み、授業を行っている。具体的には、学期ごとに教科書の内容を担当する教員を決め、その学年の全クラス(2クラス)を受け持つという具合である。右が、その分担一覧である。単元によって、学級担任が行うものと、担任以外の教員が行うものとを分け、生徒にとってより効果的になるよう工夫した。

2年部 2学期 道徳 分担一覧

植田	西	三瀬	徳田
9月	10月	11月	12月
11①「奇跡の一週間」 B-(19) 生命の尊さ 実話、感動 理科、美術、総合的な学習の時間	13①「白ご飯を指して一萩野公介」 A-(2) 節度、節制 実話、知見 保健体育、学級活動	16『注文をまちがえる料理店』 B-(9) 相互理解、寛容 作文、芸術 学級活動	20「渡良瀬川の鉱毒」 G-(11) 公正、公平、社会正義 伝記、感動 社会
11②「妹に」 B-(19) 生命の尊さ 詩、感動 理科、家庭、特別活動	13②「不安な気持ちを整えてみよう」 A-(2) 節度、節制 実話、知見 学級活動	17「六千人の命のピザ」 C-(18) 国際理解、国際貢献 伝記、感動 社会、数学、学級活動 社会活動	21「夜は人間以外のものの時間」 D-(21) 感動、畏敬の念 随想、知見 生 国語、社会

例えば、学期初めと学期末は学年主任、生命尊重や決まりの遵守等に関することは生徒指導主事、学校生活、集団生活等に関することは学級担任が行うようにした。そうすることで、生徒が、新鮮な気持ちで授業を受けることができるのはもちろん、担当する教員のねらいがはっきりし、心に響くものとなった。

イ 地域素材の教材化(市共通の取組)

西予市は宇和町、明浜町、三瓶町、城川町、野村町の5町からなり、それぞれ1校ずつ中学校がある。また、それぞれの町において、地域教材があるということを生かし、道徳科で行うこととした。そして、その授業の様子をまとめ、情報交換等を行った。自分の住んでいる地域に、大きな功績を残した人がいたことに感動し、より一層ふるさとへの思いを募らせた生徒が多数いた。道徳主任と連携を図りながら他の中学校と情報交換をすることは、市全体の教材開拓となると同時に、生徒への情緒面での成長につながることでありと強く感じた。

町	題 材	内 容
宇 和 町	おイネ、二宮敬作	日本人初の女医(強い志)
明 浜 町	塔 和 子	ハンセン病への差別・偏見の克服
三 瓶 町	姫 塚	ハンセン病への差別・偏見の克服
城 川 町	実 盛 様	地域への貢献・郷土愛
野 村 町	渡邊 房雄	他の命を守る勇氣ある行動

(4) 学校運営協議会(コミュニティスクール)の活用

年度当初に、学校経営について承認をしていただく際、コロナ禍ということもあり、書面での開催も考えられたが、初めてだからこそ、顔を見て会議をしたいと考え、WEB会議システムを利用して、会議を行った。その場で役員決めを行い、本校の抱える課題や問題点についても知っていただき、今後の協力体制を構築することができた。また、メール配信システムを使い、毎月の学校便りやお知らせ等を配信することで、日頃の生徒の様子や学校行事等について理解してもらった。本校において、解決すべき課題が見つかった時は、職員会を経て、内容によっては、本協議会を開催している。その際、学校から理由、情報、学校としての意見をきちんと伝え、その上で慎重審議している。

臨時の学校運営協議会の例

- 議 題：スクールバス設置の件
- 要望理由：本校は、スクールバスがなく、登下校には定期バスを利用している。そこで、下校時刻が合致せず、長いときは部活動終了後2時間近く待機を余儀なくされている。教育の機会均等の面から鑑みて、不平等感が残るとともにその時刻までは、教員も退勤できない。
- 情 報：待機生徒の人数と年間の学校での待機総時間
待機中の生徒の様子等
- 意 見：なぜ、今になっての要望なのか。
スクールバスは設置すべきである。
スクールバスの設置が困難であれば、小学校のスクールバスに同乗させてもらうのはいけないのか。等

(5) 情報提供手段のデジタル化

これまで学校から配布される文書や便り等は、すべて紙媒体で送られていた。そのため、家庭によっては、生徒自身が紛失し情報が行き届いていないことがあった。そこで、学校独自のメール配信システムを構築することで、課題を解決することができた。また、学校評価等のアンケートにおいても、WEB上で回答してもらい、その結果も瞬時に表され、公表するまでの時間短縮にもつながった。紙媒体での伝達がほぼなくなったことで、業務の負担軽減、改善にもつながった。また、コロナ禍のため、保護者の方々に、学校へ来校していただく機会がほとんどなく、保護者に対して学校の様子はもちろん、家庭との連携についても、伝達手段がなかった。しかし、クラスごとにメール配信が可能となり、端末を使っての伝達ができるようになったことで、学級担任や学年部からの保護者への啓発活動が活発となった。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- 家庭・地域・学校がそれぞれの役割を果たすことができる環境作りができた。
- 地域の方々との交流により、生徒自身が地域のためにできることを考え始めた。
- 道徳教育をこれまでとは異なった視点で取組を行うことで、生徒がふるさとに興味を持ち、意欲的に授業に取り組むことができ始めた。
- ICTの活用、情報のデジタル化により伝達がスムーズになるとともに、教員の業務負担軽減、改善につながった。

(2) 課題

- コロナ禍で、学校・家庭・地域が一緒になっての活動や話し合いを行っていないため細かい部分での打ち合わせが不十分である。
- 道徳科の授業では、それぞれの地域素材を使っての教材にとどまっており、教材の開発を進めていきたい。
- ICT活用においては、機器の活用方法についての研修は進んだが、アプリの活用の研修はまだ不十分である。
- ふるさとへの興味・関心を持たせることはできたが、自分のことに置き換えて考え、行動したり、その気持ちをふるさとへの貢献につなげたりすることには課題が残る。

4 おわりに

「地域の子どもは、地域で育てる」という理念を具体的に実践したいと考えた。子どもたちが、ふるさとに誇りを持つことは、単に好きであるということではない。その実践に向けて課題となったのは、学校・家庭・地域のモチベーションの温度差をなくすこと、何よりそれぞれが連携することの困難さである。それでも、子どもがいるから学校があり、家庭があり、地域があるということを再度認識し、今後も「ふるさと野村町」に生まれ育ったことを誇りに思う生徒の育成を目指した実践を継続していきたい。